

和紙

だより

■目次

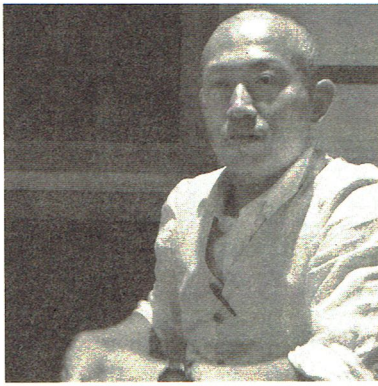
和紙な人々 辻晃さん
 取組紹介 紙の文化博物館特別展「踊る古代文字」
 レポート 「トロロアオイ」の栽培、越前で始まる
 情報欄

4 3 2 1 頁

和紙な人々

■辻晃一(つじ こういち)

1979年美濃市生まれ。2003年早稲田大学教育学部英語英文学科卒業。名古屋のベンチャー企業で4年半働いた後、2009年家業である丸重製紙企業組合を継ぎ、現在代表。「美濃と和紙を元気にする」を使命に、和紙製造&販売、観光、エネルギー、古民家再生、まちづくり、農業、教育、など、美濃市で持続可能な地域経済モデルの構築にむけてマルチに活動している。美濃市観光協会副会長、美濃青年会議所理事長など、役職多数。



■辻晃一さん(和紙産地プロデューサー)
 「ベンチャー魂で仕掛ける持続可能な産地づくり」

●和紙を町ごと売る

ベンチャー企業で働いていた頃から起業したいと思っていました。父から戻ってこないかと聞かれました。最初は、和紙は儲からない衰退産業だし、嫌だなと思いましたが、ゼロから会社を作るだけがベンチャーではなく、衰退産業を盛り上げるのもベンチャーかなと考えたら、やる気が起こってきました。和紙を売ろうと思ってもなかなか売れないなら、美濃「ごと」売つたらいい。それで、「美濃と和紙を元気にする」を自社の理念に掲げ、自分の思いを宣言し、活動が拡がっていききました。

丸重製紙は私で三代目ですが、父の代に小ロット多品種の製造態勢に磨きをかけるべく思い切った設備投資をし、小さくても特徴のある紙作りが強みです。しかし製紙業というのは、高度成長時代のやり方から離れられず、営業一つにしても大変重くて動きが鈍くなる。生産量が減っているのに、値引いて何軒もの問屋を経由させていられません。むしろ流通をもっと製造に近いものにならなければならない。それで情報発信にフェイスブックを使い始めました。予想以上に反響があり、自社工場が観光スポットにもなると思ひ、観光ツアーに組み込んでもらうよう、売り込みにもいきました。又、電力自由化に伴う地域電力会社のことでも知りました。美濃市内の電気代は、大都市圏の大手電力会社に流れますが、美濃市に電力販売会社を興せば、電気代は美濃市で使うことができます。二〇一七年、丸重も含めた五社

の共同出資で、「みの市民エネルギー(株)」の設立にこぎ着け、現在契約戸数八十軒程度で、程なく年商二億になりそうです。

衰退産業なので、今が耐える正念場なのです。そのためには製紙業だけにしがみついてもダメで、ビジョンを構築しながら、一方で常損得勘定を持つて、挑戦するしかないと思います。

●「washi-nary」

古民家ホテル「NIPPONIA 美濃商家町」二〇一五年、国連で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)という考え方は「美濃を元気にする」使命とも、重なることが多く、解りやすいので、教育や講演活動にも利用しています。

観光へのリンクは最初から考えていました。明治時代、和紙の原料問屋を営んでいた「松久才治郎」の大邸宅が美濃市に寄贈され折、邸宅活用の公募に応募し、採択されました。



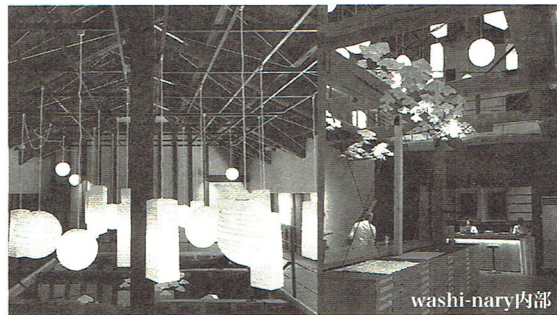
蔵を改装した和紙専門店が、washi-naryと命名しました。ワイナリーとの連想から、勘のいい人だったらワインを楽しむようにwashi-naryが楽しめるのだと解るはず。原料畑、工房見学、博物館訪問などのツアーもあり、五感で和紙が楽しめます。スマホなどは、みんなが欲しいので世界中に売りに行っても売れますが、和紙は超マニ

アツク素材なので、売りに行っても売れない。ワインならば、まずフランスのボルドーにアンテナを張るように、和紙だったらジャパンの美濃!だと認知され、世界中から和紙を買いにきてもらえるスポットになればいい。ターゲットは、クリエイター。彼等のインスピレーションが湧きやすいような空間作りを目指しました。

丸重の紙や職人の紙を見て、直接触り、サンプルで試し、様々な相談にも乗ってくれ、購入もできます。

また、かねてから街中に宿泊施設が欲しいとの声もあり、裏の古民家を改修し、二六人が宿泊できる六室の「NIPPONIA 美濃商家町」もオープンしました。内装は和紙の良さを活かした障子や壁紙、照明器具、アート作品等です。

しつらえ、外国人観光客やシニア層を呼び込む狙いです。こちらの運営会社「みのまちや株式会社」は丸重製紙企業組



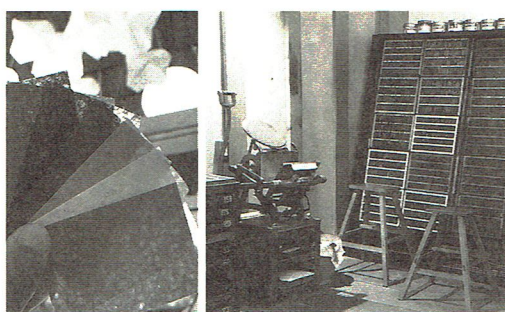
NIPPONIA 美濃商家町

washi-nary内部

合と古民家再生会社(株)NOTEとの共同出資です。

●伝えて、統べる(すべる)「伝統」

よく地域を変えるのは「よそ者、若者、馬鹿者」と言いますが(笑)、私は元々移動しながら考えるタイプで、人前でしゃべるのも好きです。インターネットというのは、やはり大変な流通革命と情報発信の手段でもあると思います。発信する時、キーワードにしているのはネガティブな言葉は使わない、人の批判はしない、自分の夢や希望を恥ずかしながらしつかり伝える。和紙業界は、高いから売れないなど、みんなネガティブになりがちですが、和紙に興味がなくとも、工場見学には興味があるという人がいるように、間口を



和紙サンプルも豊富

広くして、違う層を狙うのも大切です。

また「元氣な企業に見せる」こと。光に虫が集まってくるように、人も明るい所に寄ってきます。「伝統」とは、そもそも伝えて、統べる(すべる)と書きますが、皆さん余り伝えたいですよね。私は産地同士の対抗意識には興味がない。越前も美濃も産地の有り様も違い、個性がある。だから、それぞれの特性を活かして考えればいい。いろんな産地があつて、多様性のあることの方がむしろ素晴らしいと思います。

■紙の文化博物館特別展「踊る古代文字」企画意図と書の新たな楽しみ方を聞く

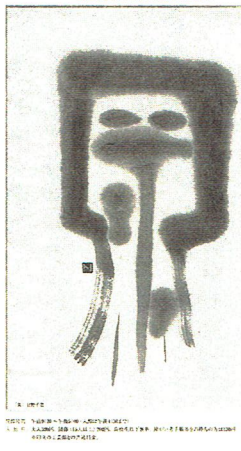
本年四月十九日〜六月三日、越前市の「紙の文化博物館」では、古代中国で使われていた古代文字の面白さを楽しむユニークな展覧会が開催された。この展覧会に作品を提供し、監修したのは、筆・墨・硯・紙という「文房四宝」にも詳しく、書作家で和紙文化研究会の会員でもある日野雲さん。ゴールドenウィーク中には、講演会や古代文字を越前和紙に書くワークショップなどの関連イベントも開催され、文字の魅力や書の新たな楽しみ方が呈示された催しとなった。

●古代文字への興味

日野さんは、古代文字である甲骨文字(中国・殷時代の亀甲獣骨等に刻まれた文字)や金文(中国の殷・周時代の青銅器に鑄込まれた文字)に精通した、元國學院大學文学部の故佐野光一教授の元で学び、若い頃には字書編纂の助手を務め、書道専門出版社にも勤めた経歴がある。また、福井県出身で漢字の成り立ちを体系化した白川静(しらかわしずか)博士の「白川文字学」を学び、文字の成り立ちに興味を抱き続けてきた。

踊る古代文字

紙の文化博物館特別展



チラシに使用された文字は「泉」。水源の意味で、水が流れ出し川になる形を表す

「甲骨文字は発見されて、二二〇年しか経っておらず、日中でいろいろ研究されていますが、白川先生は文字研究の中で『字統』(字源辞典)や『常用字解』を著し、漢字の成り立ちを世に広く示されています。

福井県は、白川先生の功績を称えるとともに、漢字の歴史や成り立ちを学ぶ契機として、白川文字学を初等教育に取り入れています。これは漢字教育にとつて素晴らしいことと他県にはありません。それらを越前市に生かすには、当地が和紙の大産地であることから、書道が相応しいと提案しました。越前の紙に古代文字を書く、それは原始的な形(漢字)を書で色々と表現することで、老若男女関係なく楽しめ、白川文字学と越前和紙の普及につながっていきます。どう書いてどう表現するのか、まずは私の和紙・墨色・古代文字を絡めた展覧会をやってみることにしました。」



紙の文化博物館での展覧会の様子

●造形的魅力と淡墨表現

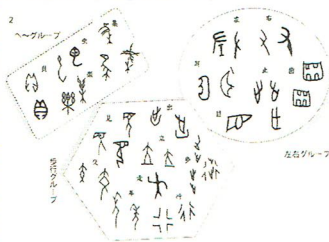
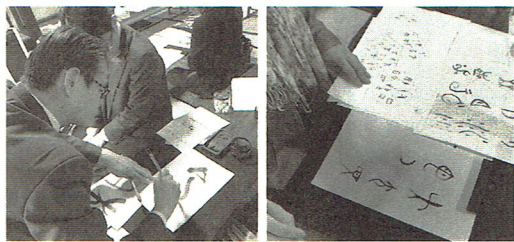
「字がうまく書ける」ことが書道の目的であると考えている人は多いが、古代文字は、隸書、行書、草書、楷書と違い、物や意味を表す原始的な姿を持ち、文字に潜む歴史や価値観、造形的な美に目がいくならば、かなりディープな楽しみ方ができる。

例えば、展覧会作品にも出品した象形文字「至」という字は、字者によって「鳥が高い所か

ら飛んできて地上に下りる」という説と、「矢が上空から地に降り着いた」という説がある。何しろ発見されて二二〇年しか経っていないので、諸説ある訳だ。日野さんはこれらの説を精査し、妥当だと思われる説を選び、出品作の一字作品には全て、英語の解説も付けた。「漢字の書は日本人でも難しいが、造形的な甲骨文字は、外国人にも理解でき、グローバルに楽しめる素地があるのでは」と日野さんは語る。

もうひとつは、色の濃い墨で、滲みやかすれの妙を表現する従来の書ではなく、墨の色は、黒とグレーだけでないことも多くの人に知ってもらいたかったため、淡墨表現にこだわった。「淡墨」の美しさと多様な墨の扱いを追求する書集団の人は「和紙であれだけの墨色が出せるとは！」と驚いたという。

ワークショップではグループに分け、文字の説明後、好きな文字書き、最後に「令和」を書いた。



二つの説がある「至」

●多様な表現を可能にする和紙

その多様な墨色表現を可能にしたのが、和紙である。書道によく使われる中国の宣紙(本画仙)や和画仙は、確かに滲みや墨色もいいが、滲みの種類(形態)はあまりない。かねがね、書表現における「紙」と「墨」と「水」の相性を研究してきた日野さんは、その三位の相性で和紙ほど墨色の多様性が出る紙はないという。「私は楮100%の紙百種類くらいに墨濃度や水を変えて)を落としてみました。随分違う。同じように見える楮紙でも工房で違う。滲み過程の色の変化と末端の形状の多さは画仙紙類のそれと比較にならない。淡墨にすると墨色の色味が多様に出せ、それが作品をより繊細で美しいものにし、表現の幅が拡がります。」

今回の展覧会に出品した四五作品に使用した紙のうち、四つは高知、因州、白石、中国産だが、他は越前の薄口、厚口の100%楮紙、雁皮+楮の未晒混合紙、簀の目入100%楮紙、三楮+竹紙、麻紙、藁+針葉樹、マニラ麻+三楮+輸入雁皮紙、など様々な和紙が使われ、墨を磨る水もエビアン、コントレックス、日田天領水など四種類、墨も青系、茶系など十種類を使い、すべて解説にデータとして収録した。

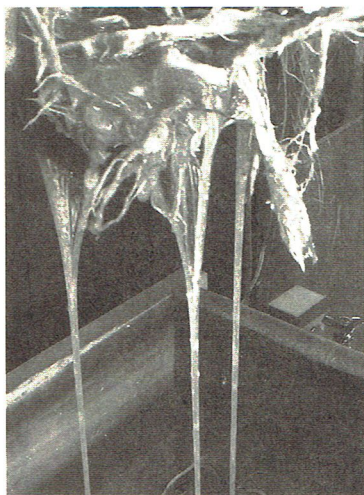
「今回私が注目した紙は、書道用ではなく、水墨画用と銘打っている二種の紙でしたが、おふま用の雲肌麻紙や鳥の子紙なども十分魅力的に使えると確信しました。書道用となっていないと普及しないことありますが、基本的に紙はどんなものでも書の対象であることを忘れてはならず、多くの書道関係者に『和紙でこれまで見たことのない墨色表現をしてみませんか』と伝えていきたい。」と日野さんは抱負を述べた。

●「トロアオイ」の栽培、越前で始まる

●衝撃が走ったトロアオイ生産中止報道
今年六月九日付の全国紙、朝日新聞デジタル版に「手すき和紙業界に大打撃 トロアオイ農家が生産中止へ」との報道があり、SNSで拡散され、和紙業界に衝撃が走った。

全国紙掲載後、福井県和紙工業協同組合にも本件に関する問い合わせが数件あり、トロアオイの危機Ⅱ和紙業界の危機Ⅱ越前和紙存続の危機といった風評被害が発生している。しかし結論から言えば、茨城県での生産中止報道は、JA担当職員の勇み足もあり、必ずしも生産農家の思いを反映しておらず、当面の間は栽培継続の意向が示された。朝日新聞は六月十六日の夕刊でこの件の訂正文を掲載している。

この度のトロアオイに限らず、楮などの慢性的原料不足は予断を許さず、越前でも生産農家、全国手すき和紙連合会(全和連)、各地の和紙産地などと連絡を取り合いながら、今後の対策を模索している。福井県和紙工業協同組合の原料調達責任者、山下泰央さんにこの間の状況を伺った。



●トロアオイの生産現況

周知の如く、国の重要無形文化財「越前鳥の子紙」の指定要件には、抄造は「ねり」にトロアオイまたはノリウツギを用い、とあり、指定要件を充たすためにも必要不可欠な原料だ。越前鳥の子紙に限らず、越前奉書、ユネスコ登録を受けた本美濃紙、細川紙、石州半紙などもこれに該当する。

トロアオイが、すくになくならないのは先述の通りだが、茨城県新ひたち野J A内「茨城県黄蜀葵根契約栽培農協協議会」(通称…ネリ協)で、トロアオイの八〇九割をまかっていたのは、東日本大震災の前後まで、現在は六〇七割程度に低下。代わりに埼玉県、長野県が増産し、一部中国産の輸入品も流通している。



●栽培の難しさ

トロアオイは適応力が高く、温帯であればどこでも栽培可能で、乾燥には強いが湿潤すぎると品質の劣化や病気の懸念があるため、水はけの良い土壌が必要。又、連作には不向きで、数年ごとの輪作が良いとされる。

茨城県の作付け地は、近隣に紙漉き産地がないにも拘わらず、気候・土壌とも最適で、これまで栽培されてきた最大の理由だ。今までに越前以外の美濃、高知、富山などでも栽培されてきたが、茨城のように成育しない。雑草負けしやすく、除草をこまめに行う必要があるが、除草剤に弱く、使用することはできない。どこでも栽培可能とあるが、手漉き和紙に適

した根にするには、ゴボウのように太く真っ直ぐに長く栽培する必要がある。土壌内の小石などに抵触すると、根が枝分れしてひげ状になり、良質な粘液を抽出できなくなる。また、栄養を根に送り、太くするために「側葉かき」「芽かき」「芯止め」作業はいずれも真夏の炎天下で手作業で行わなければならない。機械化ができないが故に重労働となる。更には欠いた芽や葉は、根の病気の要因となるため畑に残さないことが好ましい。

●人と人の繋がりがこそすべての根源

茨城県ネリ協を訪問した折、栽培を今まで担ってきた農家の田上さんは「要望があるので続けてきたが、元々は注文に比べられない状況が続く。一部に迷惑をかけるなら、いつそのことやめてしまおうかと考えた時期もある。体はきついし、(収入を考えると)割に合わない」と心境を明かしたという。

山下さんは、「今回の報道のお陰で、トロアオイ農家さんと話す機会が増え、一気に産地間の距離が近づきました。人と人との繋がりがやはりすべての根源で、産地間の交流を深めていくことが大切」と語る。

根気よく農家に必要性を訴え、栽培継続のお願い、減量分を他のトロアオイ産地に置き換えること(他産地への増産依頼)、足りない分を自家栽培品や化学粘剤などで補いつつ、今まで通り、かわらず和紙生産を継続していくという和紙業界の今後の方向性を話した。お陰で危機感を感じ取って頂き、トロアオイを必要としているこの人達のために、一肌脱いでやろう!と、実際に栽培を手掛ける農家が三〇四軒増えたとのこと。又、ネリ協の松田さんは「紙漉き産地から栽培を学びたいという声

があれば、積極的に受け入れる」とも言っており、栽培減を見越した大量注文、産地のキャバを越える注文は、かえって農家の栽培意欲を欠いてしまうとの指摘もある。このまま順調に生育すれば、茨城では昨年以上の収穫見込みとなる。

●越前でも面積二反で栽培に着手

今回の報道を受け、ただちに自家栽培に着手した紙漉き産地も多く、越前でも自家栽培を開始した。美濃和紙、石州和紙、細川紙、土佐和紙、富山和紙、九州の紙漉き産地などは、以前より自家栽培していたので、今後増産する見込み。因州和紙は本年度より大規模試験栽培開始。静岡県三島市でも栽培に着手した農業会社がある。



以下の様な態勢で設立され、栽培畑の整備が始まった。

加盟：和紙組合のネリ使用組合員十五社。会長：五十嵐康三氏(五十嵐製紙)。代表：石川浩和紙組合理事長(相談役)。栽培指導者：今井三千穂氏(樹木医) + 田上進・敏枝氏(茨城県ネリ生産農家)。種の入手先：ネリ協。畑面積：約十アール(二反)。目標収穫数量：五〇〇kg〜一〇〇〇kg。畑はパピルス館近くの個人所有地を二年間借り受けた。

栽培参加者は、畑の石拾い、肥料撒き、トラクター掘り起こし、畝づくり、種消毒、除草作業、殺虫剤散布、間引き、芽欠き等の指導を受けながら順次作業を行っている。生育状況は、今年の梅雨の長雨で根腐れ等が心配され、ネキリムシの発生警報も出ているが、皆は十一月月上旬、中旬頃の収穫を願って、頑張っている。



尚、代替となる化学粘剤は、昭和四十〜五十年代、ごろより既に多種存在しており、越前でも夏場など気温の高い時期にトロロアオイと併用している。四国や九州などの紙漉き産地では、化学粘剤一〇〇%で、稼働している漉き屋さんもあるとのこと。組合ではさらに良いものがないか、化学粘剤の品質や和紙への影響について調査をすすめている。

情報欄

●イベント情報

■千年未来工芸祭

時：8月31日(土)〜9月1日(日)
場所：越前市AW-1スポーツアリーナ
越前和紙、越前打刃物、越前筆管が一堂に会するクラフトフェスティバル。

■第57回 全国手すき和紙連合会総会・研修会・全国和紙展

時：9月4日(水)総会・研修会
場所：コープイン京都
時：9月5日(木)全国和紙展
場所：京都文化博物館 中庭

■大日本工芸市

時：9月13日(金)〜16日(月)
場所：近鉄百貨店四日市店
「地域のヒト・モノ・コトのふれあい」。越前和紙青年部会参加(9/14-15)。

■ものづくりフェスタ

時：9月14日(土)〜16日(祝・月)
場所：サンドーム福井

平安の装飾紙復元を行った復元料紙(飛雲・打雲・水玉)の展示。

■国際北陸工芸サミット テオ・ヤンセン展

inふくい×Craft exhibition
時：9月21日(土)〜10月27日(日)
場所：サンドーム福井
テオ・ヤンセン氏と越前和紙の世界初コラボ

■RENEW

時：10月12日(土)〜14日(祝・月)
場所：越前の紙漉き工房
“見て・知って・体験する” 作り手たちとつながる体感型マーケット。
RENEWのURLは <<http://renew-fukui.com/>>

■伝統的工芸品月間国民会議全国大会

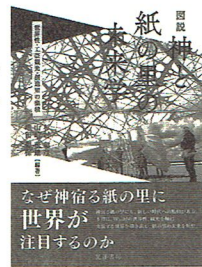
時：11月2日(土)〜5日(火)
場所：岩手県盛岡市
時：11月3日(日)〜5日(火)
場所：岩手県産業文化センター ふれあい広場
越前和紙は墨流し体験参加予定

■料紙展とシンポジウム

時：12月14日(土)
場所：大東文化大学(東京)

●新刊紹介「図説-神と紙の里の未来学」

福井県立大学の地域産業への貢献を目指した産学プロジェクトで越前和紙と交流し、伝統産業の未来を考える本としてまとめられました。切り口は、「伝統産業のグローバリゼーション」と「工芸観光」です。
-杉村和彦、山崎茂雄、増田頼保編著
-2019年4月20日発行
-A5版 見洋書房刊
-本体1800円(税別)



編集後記

日本画に使う膠、漆工芸の漆はじめ、伝統産業に使われる原材料は多種多様で、どの分野でも不足、又は入手困難の危機にあるようです。農水省も工芸作物栽培支援をしているようですが、ノウハウを共有しながら、地産地消や自給製造の動きを活性化していきたいものです。(よ)

季刊・和紙だより 第62号(2019年春夏号) 発行日：2019年8月20日 和紙だよりURL→<http://washidayori.jimdo.com/>

発行人：福井県和紙工業協同組合 石川浩 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所：Office YOMOSA 〒520-0025 滋賀県大津市皇子が丘1-6-6 #209 Tel/Fax: 077-523-4172 E-mail: myomosa@mx5.canvas.ne.jp

編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子 印刷所：有限会社新進堂印刷所(京都府宇治市) 用紙：竹簀目入り鳥の子紙(石川製紙株式会社製) ※無断での転写・転載はお断りします。